エール
—薬剤師の幸せな人生を願って—

鍋島 俊隆
NPO法人医薬品適正使用推進機構理事長／藤田医科大学客員教授／名古屋大学名誉教授／Al.I. Cuza大学（ルーマニア）名誉教授

第 6 回

ワクチン接種を機会に「顔の見える薬剤師」へ

米国の薬局チェーンであるウォルグリーン・ブーツ・アライアンスの薬剤師は、すでに2,000万回を超える新型コロナウイルス（COVID-19）ワクチンの接種を行っている[1]。翻って、我が国はどうだろうか——。

日本病院薬剤師会会長を務めた故・全田浩氏は、かつて「顔の見える薬剤師」になろうと提唱された[2]。深く賛同する私は、日本でも薬剤師がCOVID-19ワクチン接種のような対人業務に積極的にかかわって、市民に「顔の見える薬剤師」となり、存在価値を高めてほしいとエール[3]を送ったが、残念ながら実現しなかった。

❖

しかし、医療従事者の一員として、医師や行政、経済界から薬剤師が期待されている側面が明らかとなったのは大きな成果であろう[3]。実際、COVID-19ワクチン接種にあたって、薬剤師は接種こそ担っていないものの、周辺業務において多大な貢献をしている。中でも、薬局でのワクチンの薬理効果、副反応、服用中の医薬品との関係などについての市民への情報提供[4]、薬局やコールセンターでの相談[5]、接種会場での予診票記入の支援[6]などは、薬剤師が日ごろ何をしているのかが市民に理解される業務と言える。

ただ残念ながら、接種の安全性や迅速性を確保するためのワクチンの品質・数量管理、配送、注射器への無菌的小分け充填などは、重要であるにもかかわらず、“縁の下の力持ち”の業務で、市民の目に触れる機会はない。「顔の見える薬剤師」となるには、１日100万人の接種を安全、かつ迅速に達成するため、薬剤師が物流管理や注射液の調製をしており、その作業にどれだけ労力を使っているのかを市民に広報しなければならないだろう。

❖

そこで、ここからは薬剤師による“縁の下の力持ち”の業務を紹介しよう。

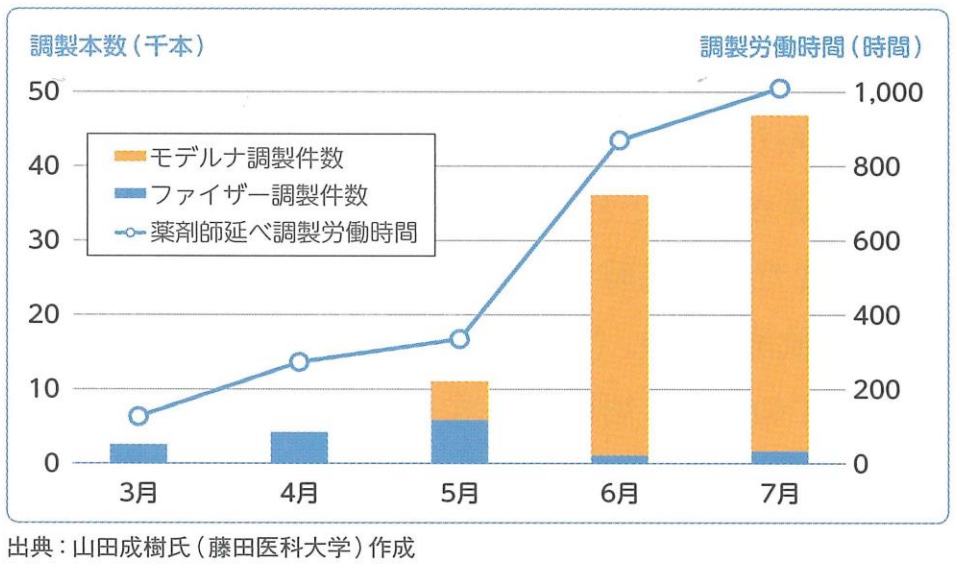
愛知県庁では、COVID-19感染症対策に約150名の薬剤師職員が関与している。その場所は、県庁感染症対策局（患者の入院調整やワクチン業務：10名）、県内12保健所（コロナ専任：50名、所内コロナ兼任職員：50名、県庁保健医療局からの応援：30名）、衛生研究所（PCR検査業務：10名）、集団接種会場（接種支援：2名）である。

愛知県での患者発生件数は、今年８月28日には1,876人に達した[7,8]。こうした状況下、本庁や保健所の前線で働く薬剤師職員は休みも取らず、夜中まで働いていた者もたくさんいたが、誰にも知られていない。“見える化”のためには、ワクチン接種回数、入退院患者数などに連動した業務量や労働時間などのデータを取り、薬剤師の働きぶりをアピールすべきだ。

また、藤田医科大学の薬剤師は、ワクチンの納品からロット・在庫管理、シリンジ充填、解凍後の期限管理、搬送、会場へのワクチン提供までを休日返上で行っている。地元の大手薬局チェーン、スギ薬局の薬剤師もボランティアで毎日２名が充填をしている。こうした結果、今年3月からは指数的に調製本数が増加するとともに、薬剤師の労働時間が増大している。たとえば、7月のワクチン調製は46,870本で、延べ労働時間は1,010時間、延べ担当薬剤師数は124人に上る（【資料】）[9]。1日1,500人接種の場合、薬剤師4名で約8時間を要している。

自分たちが行っている“見えない”仕事を、病院や薬局店頭で市民に積極的に広報して“見える”ようにしていく取り組みが、薬剤師による貢献の認知度を市民の間で高め、薬剤師の未来を拓くことにつながるはずだ。

【資料】 薬剤師による新型コロナウイルスワクチン調製本数と調製にかかる総労働時間



出典：山田成樹氏（藤田医科大学）作成

Profile
なべしま・としたか
1973年大阪大学大学院薬学研究科博士課程単位取得退学。名古屋大学大学院医学系研究科教授、同大学医学部附属病院薬剤部部長（併任）、名城大学大学院薬学研究科教授、名城大学比較認知科学研究所所長（併任）などを経て、現職

• ©㈱ファーマシィ,『TURNUP No.53』2021.12.1発行より抜粋